

## 1. 「視線入力装置」について

視線入力装置とは、目の動きだけでパソコンの操作を可能にする装置です。本校では自立活動のコミュニケーション指導に導入しています。視線履歴からどのような見え方をしているのか、それによりどのように教材を提示すれば良いのかというアセスメントとしての利用や見る力・見比べる力を高め、好きなものを視線で選択できることにつなげていく指導、また言語障がい有し、文字を理解しているにもかかわらず上肢の操作が困難で筆記やAAC 機器による文字入力ができない児童生徒に対し、コミュニケーション手段の一つとして視線で文字を入力する指導にも取り組んでいます。

## 2. 本校での取り組みの紹介

●右半身麻痺の生徒。発声は不明瞭で、自分の意志に反して手が震えてしまう振戦という症状のために、筆記困難。視線入力装置によるコミュニケーション手段の獲得を目標とした学習に取り組む。自分の思いを綴ったり他者へ手紙やメールを送ったり、高等部卒業後の生活を見通し、パソコンを視線で操作できることを長期の目標とした。

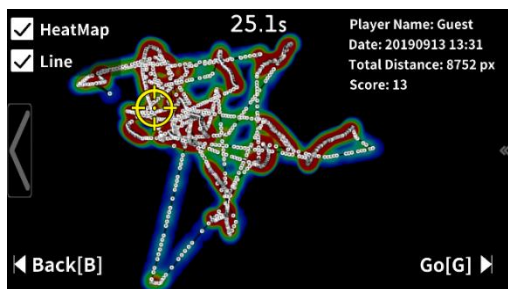


図 1

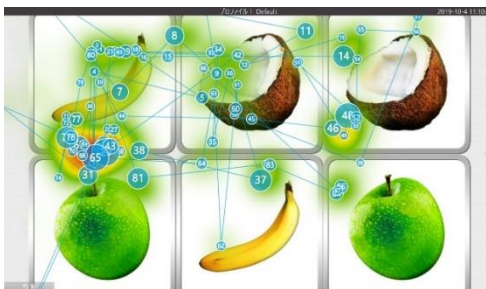


図 2

風船割りや射的に取り組み、視線履歴を分析した。その結果、右半分への視線の移動が困難であることがわかった(図 1)。また視線入力ソフト「SensoryEyeFX」の神経衰弱(6枚)を実施すると、左上から左下に開いて、右半分(特に右下)が残る傾向にあった(図 2)。しかし、一か月後には、右上からカードを開くことができ、全カードのマッチングまでの時間も日を追うごとに速くなった。1年後には神経衰弱 20 枚に取り組み、その半年後には、50 音表を使い、文字を入力する学習にも取り組めるようになった。その後、自分の気持ちを自由に文章入力することができるようになった(図 3)。



図 3

●右半身麻痺の生徒。発声は不明瞭であるが、イエス・ノーははっきりしており、簡単なサインや指さしで意思表示ができる。選択する際に左側を選択することが多く、麻痺側を意識して見ることを目標として学習を始める。

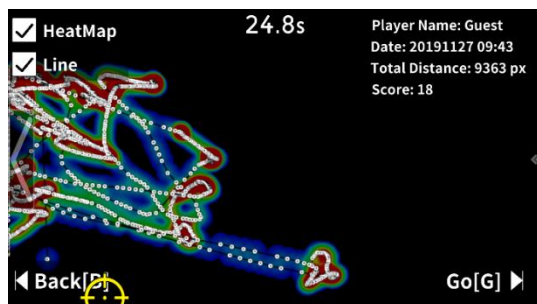


図4



図5

風船割り(図4)では、左から出てくる風船にしか注意が向けられていない。しかし注視する力はあるので18個もの風船を割ることができている。また、画面にひとつ星が現れ、注視すると消えて、また別の場所から星が現れるソフト(図5)では、右に現れた星を見つけ出すことができなかった。

週に1回、継続的に麻痺側の右側を意識して見る学習を開始し、9か月後には風船割りで見える範囲が広がり(図6)、また見つけられなかった右側の星を注視できるようになった(図7)。またiPadの画面上で4つの教材を選択する課題で、視線入力装置に取り組む前は左下にある教材の写真を選択することが多かったが、右にある教材も選ぶことができるようになった。

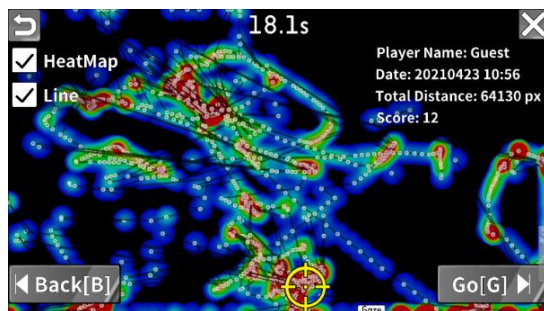


図6

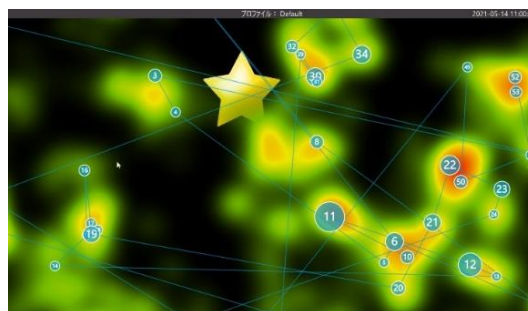


図7